

研究の概要

吉野川市立高越小学校

1 本校の実態

本校は、平成30年度に山川・美郷地区の小学校4校を統合してできた新設校である。校区は吉野川市西部に位置し、阿波富士と称される高越山と吉野川の間に広がっている。統合で広くなった校区には、「船窪のオンツツジ群落」「美郷のホテル及びその発生地」の2つの国指定天然記念物も有し、豊かな自然に恵まれた環境にある。コロナ禍で思うようにはいかないが、子供たちや教員が新しい校区を知り、地域の方とつながる活動も進めている。

児童数は175名、各学年単学級の6学級と特別支援学級7学級計13学級の小規模校で、統合にともない58%の子供はスクールバス通学をしている。今年度で開校4年目を迎え、統合前の学校からの編入も5・6年生のみとなり、高越小学校としての特色が少しずつ生まれているように感じる。

子供たちは、素直で友だちとの関わりを楽しみながら生活し、自分の役割や学習活動にも真面目に取り組む。一方、小規模校ゆえの人間関係の固定化、集団での活動に苦手さのある子供、自己表現の不十分さなど、協働的な活動を進めるには支援や配慮を要することもある。学習面については、学力向上委員会で「学習の仕方が分かり見通しがつくと、自分の考えをもって進んで取り組むことができる」よさがあるが、「自ら課題を設定すること」や「自分の考えを筋道を立てて話したり、文章に表現したりすること」に課題があると分析した。

このような現状をふまえ、本校グランドデザインに示す学校教育目標「心豊かに響き合い 命かがやく高越の子」を目指し、主体的に学び、互いに高め合うための授業改善について継続的に取り組んでいる。さらに、今年度からはスクールワイドPBSによる基本的学習規律の定着や望ましい人間関係づくりも進めている。

2 運動や体育学習についての実態

昨年度と今年度の6月に「体育・運動習慣アンケート」を実施した。令和3年度は、93%の子が「運動することが好き（図1）」と答えている。

運動が好きな理由としては、「記録が伸びた」「できなかったことができた」「勝った」など自分の意欲的な取組が良い結果につながったことを挙げている。さらに、「褒められた」「仲間と一緒に活動できた」「体を動かしてすっきりした」など運動を通して他者と良い関わりがもてる、心身に良い影響があると感じていることも分かった。

しかしながら、休み時間の様子を見ると、毎日体を動かして遊ぶ子が約半数であった（図2）。また、学年が上がると委員会等の活動もあり、体を動かして遊ぶこと

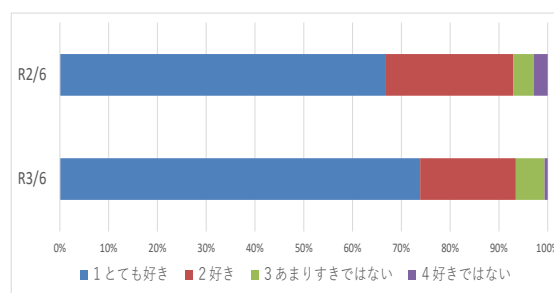


図1 運動することが好き

の優先度が下がってくることも分かる。運動している子とそうでない子のいわゆる二極化の傾向は本校でも顕著である。

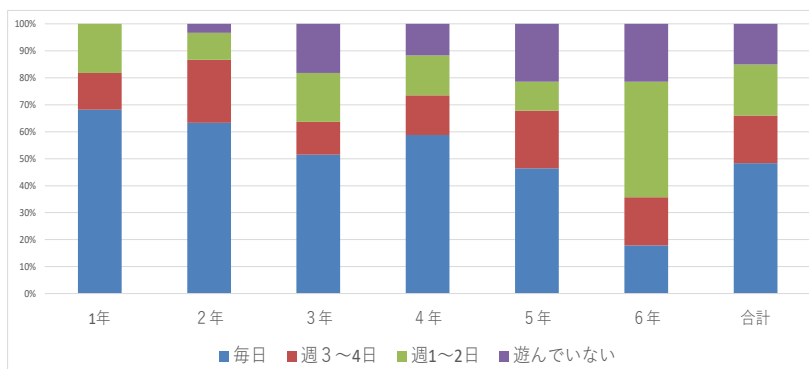


図2 休み時間に体を動かして遊んでいる

加えて、肥満傾向の子供の増加やスクールバス通学による運動量の不足など本校独自の課題もあり、これまでも保健指導や外遊びの奨励、運動イベントの実施などに取り組んできた。昨年度からは、日課の見直しによる休み時間の延長、アリーナの常時開放、日常的な運動の場の設定、用具の貸し出しなど運動に親しむ環境作りにも努めている。

一方、体育学習については、令和3年度では、99%の子供が「体育学習は楽しい(図3)」と答えており、「運動することが好き(図1)」と答えた子供を上回っている。

「運動することが好きではない」と答えた子供が「運動は苦手だけど体育には楽しいのもある」「みんなと協力してできるのは楽しい」という理由で体育学習を楽しいと感じていた。

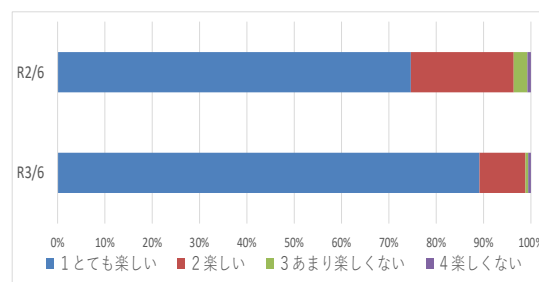


図3 体育学習は楽しい

「体育学習は楽しい」理由は、「体を動かすのが楽しい」が最も多いが、次のような理由も見られた。「今までしたことのない運動を知ることができる」「体育はおもしろいことがいっぱい」という理由からは、体育学習が子供たちにとって運動を「知る」場でもあることが分かる。さらに、「できないことができる」と達成感を感じる」「たくさん失敗しても、工夫すると成功して楽しい」からは、課題解決の場であること、「みんなと一緒にできる」「みんなと協力したり、工夫したりしてできる」からは、友達との関わりを豊かにする場であることなど、子供たちにとって様々な意味をもつ場であると分かった。また、「体育学習は楽しくない」理由は、「けがをする時が多いから」「運動が好きではないから」であった。不安なく参加でき、挑戦したいと思えるような体育学習を展開し、運動の楽しさを少しでも味わえるよう取り組むたい。

3 研究の経緯

本校では、令和2年度から体育科の研究に取り組んできた。しかしながら、本校の研究の開始と時期を同じくして新型コロナウイルス感染症対策のための学校休業や分散登校、体育学習や学習内容の制限など、従来の学校生活とは異なる環境となった。

そこで、1年目は、徳島県小学校体育連盟研修部（以下、徳島県）の主題にある「運動の本質的なおもしろさ」や「『おもしろいコト』の共有」についての解釈など理論的な研修やアンケート調査による本校の子供の実態把握から研究を始めた。その後も、全国及び徳島県の感染状況等の動向を注視しながら、学校における感染予防及び感染対策による教員の負担軽減を優先し、次のような内容（図4）で研修を行い、研究を進めた。

	令和2年度	令和3年度
1学期	<ul style="list-style-type: none"> ・ 県主題について（県事務局） ・ 「体育・運動習慣アンケート」実施 ・ 本校主題について ・ 指導案について ・ 学習指導案検討会（県事務局） 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 今年度の本校の取組について ・ 「体育・運動習慣アンケート」実施 ・ 教員間での模擬授業 ・ 指導案について（県事務局） ・ 県指導者講習会参加 ・ 学習指導案検討会（県事務局）
2学期	<ul style="list-style-type: none"> ・ 低中高各学年団による教材研究 ・ 校内研究授業（1・3・6年生）及び授業研究会の実施（助言者） ・ プレ大会助言者との打ち合わせ ・ 参観者限定でのプレ大会（2・4・5年生公開授業）の実施 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 低中高各学年団による教材研究 ・ 校内研究授業（1・3・6年生）及び授業研究会の実施（助言者） ・ 助言者との打ち合わせ ・ オンラインでの統一大会（2・4・5年生公開授業）の実施
3学期	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「体育・運動習慣アンケート」実施 ・ 今年度の成果と課題のまとめ ・ 次年度の主題について（県事務局） 	（予定） <ul style="list-style-type: none"> ・ 「体育・運動習慣アンケート」実施 ・ 研究の成果と課題のまとめ

図4 令和2・3年度の体育学習に関する主な研修内容

研究の方法としては、学習指導要領の体育科の目標が低・中・高学年の三段階で示されていること、教員同士の協働的な取組の推進等から低・中・高学年で同一領域の学習内容（図5）で研究を進めることとした。

	低学年	中学年	高学年
令和2年度	ゲーム （鬼遊び）	器械運動 （マット運動）	保 健
令和3年度	表現リズム遊び （表現遊び）	ボール運動 （ベースボール型ゲーム）	陸上運動 （ハードル走）

図5 令和2・3年度の研究領域

4 本年度の研究

(1) 徳島県の主題の受け止めについて

今年度、徳島県では、昨年度に引き続き、「豊かな学びが子供の未来をつくる体育学習」を研究主題とし、新学習指導要領で示されたこれからの時代に求められる資質・能力の育成を目指した体育学習を追求している。「豊かな学び」については、体育学習の中で教科横断的な視点に立った資質・能力を豊かに発揮している学びであり、さらに、「見通しをもって学習に参加し、新たな価値を見出し、仲間と関わりながら課題解決に挑戦しようとする学び」としている。

また、副主題を「『おもしろいコト』の共有から学びをスタートする授業づくり」と設定し、学びのはじまりを大切にした授業づくりに取り組んでいる。研究のキーワードである「おもしろいコト」は、「その運動に夢中になる出来事」、「『おもしろいコト』の共有」は、「これから学習するのはこういうことだということをみんなで共通理解すること」としている。

本校では、徳島県の主題の「豊かな学び」としてあげられた「見通しをもつこと」として、学習導入時の「おもしろいコト」の共有、その後の学習展開では、自己の課題に気づき、課題解決に取り組もうとすることと捉える。さらに、「仲間と関わる」いわゆる協働的な学びの中で、「新たな価値」を見出したり、共有したりすることを進めたいと考え、実践する。

昨年度、本校では、運動の「本質的なおもしろさ」や「おもしろいコト」の解釈を進めながら、導入時の「『おもしろいコト』の共有」を図る場や問いについて、これまでの徳島県の研究成果をもとに、授業実践を通して研究してきた。単元の導入時に、その運動等の本質に迫る夢中になる出来事を体験し、「もっとやってみたい」という意欲や「自分もできる」という自分への期待をもって学びをはじめることができると、主体的な学びへの原動力となる様子が見られた。その体験を通して「これから学習するのはこういうことだ」という「おもしろいコト」の共有を図ることで、子供たちが同じ意識をもって学習を進め、課題解決や価値の共有のための協働的な学びを深める実践を進めたい。

これらのことから、本校では、徳島県の主題に沿って、「おもしろいコト」の共有を図り、そこから生まれた学習意欲をつなげ、友達との関わりや課題解決の楽しさも感じながら体育科の目標を達成する「豊かな学び」を目指して研究することとする。

(2) 昨年度の実践の考察と今年度の取組の視点について

① 「おもしろいコト」の共有を図る場の設定

事前調査等の子供の意識、発達段階、ユニバーサルデザインの視点等をもとに、導入時には、どの子も今ある力で挑戦できるような場を設定した。分かりやすいルール（写真1）、不安や苦手意識に応じた用具（写真2）、子供の運動量に応じたコート of 広さなど、子供の実態やその運動領域の特性に応じた環境

を整えて学習をスタートすることで意欲的に取り組む姿が見られた。



写真1 判定を分かりやすくするフラッグ



写真2 傾斜のついたマット

一方、子供の意識と教師の意図にずれがあるときは、思ったような学びにつながらず、子供の意識に沿い、環境を修正することも必要であった。また、今年度は、その運動の「おもしろいコト」を教材化する際には、低・中・高の2学年の系統性や次の学習展開へのつながりなども考えていきたい。

② 課題追求のための支援や手立て

保健領域では、学習課題を自分事として捉えるために、自分たちの生活と結びつける活動を学習の中で繰り返し行った。導入時だけでなく、学習途中で自分たちの生活を振り返ったり（写真3）、学習の目的を他学年への発信としたり（写真4）することで、得た知識を生活の中で生かしていくという視点で学習を展開することができた。一方、総合的な学習や学級活動等を組み合わせた大単元として組んだ場合は、子供の意識をどのように見取り、つないでいくかということが学習を通しての課題として挙げられた。

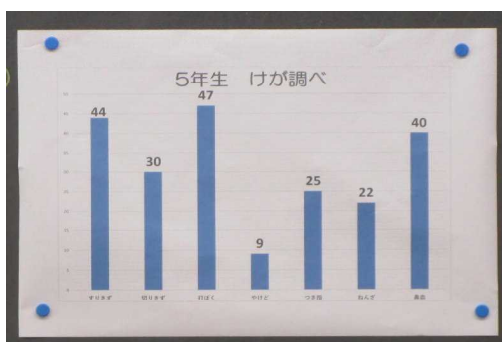


写真3 けが調べ



写真4 感染症予防ポスターづくり

運動領域では、おもしろいコトの共有が図れたら、子供の意識を見取りながら、必要な情報提供をしたり（写真5）、それぞれの課題解決の場を設定したり（写真6）しながら学習を展開した。学習中の様子と「わたしたちの体育」等を使った学習後の振り返りで子供の意識を見取りながら、必要な場面で情報提供や技術指導などを行うことで、知識の獲得や技能の向上につながると、子供が挑

戦の意欲を失わずに学び続けることができる様子が見られた。

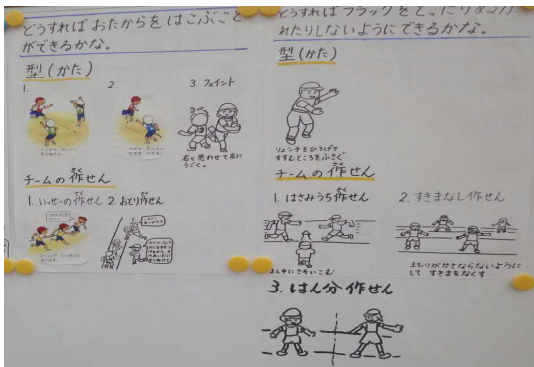


写真6 課題解決の場(開脚前転)



写真5 情報提供(攻めや守りの型・作戦)

しかしながら、昨年度の実践の中では子供の学習意欲に差ができる、続かないといった様子も見られ、一番の課題として挙げられた。

その要因として、課題意識がもてないこと、薄れてくることなどが考えられた。取組後のアンケートで「自分なりのめあてをもって学習した」子が半数(図6)だったことから一人一人が見通しをもって学習するための手立てが必要であったと考える。また、課題を見つけても、課題解決になかなかつながらない、自己の成長や伸びが実感できない時にも学びが停滞する様子が見られた。

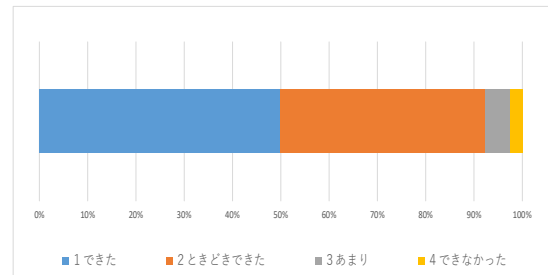


図6 自分なりのめあてをもって学習した

「できた」という実感を味わい、「もっとこうしよう」という意欲をもちながら学習を進めるために、教師からの支援に加え、一人一人の学びを全体に広げ、課題解決のための視点として共有する授業の展開等を探っていきたい。

③ 協働的な学びのための支援や手立て

取組の前に行った体育学習に関するアンケートでは、話し合う活動や助け合う活動など協働的な学びが十分ではないことが分かった(図7・図8)。

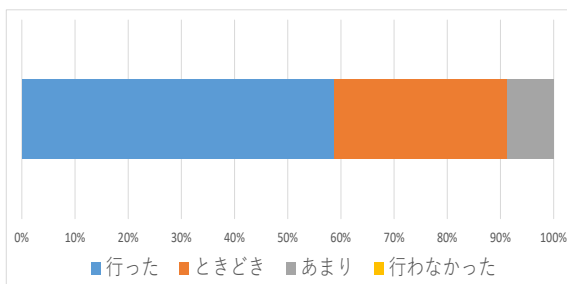


図7 話し合う活動を行った

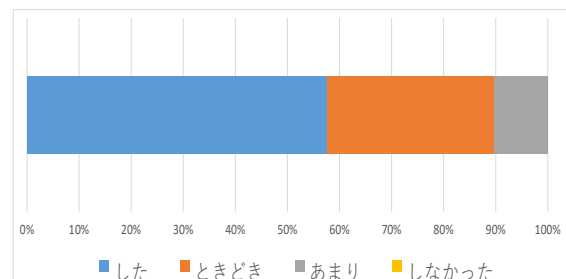


図8 助け合ったり、役割を果たしたりした

そこで、1時間の学習の中でお互いの学びを共有する時間（写真7）、同じ課題や場で活動する子供たちが交流する場（写真8）を設けた。

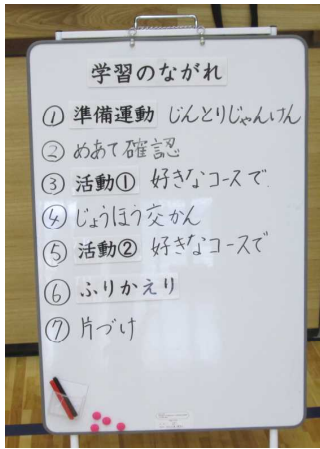


写真7 学習の流れ

5年生 けがの予防



4年生 マット運動



写真8 交流する場

保健領域では、自分の意見を付箋に書いて提示したり、座標軸など思考ツールを用いたりする（写真9）など、視覚化して整理することで、話し合いの観点や互いの意見の相違点を明確にしながらか話し合いを進めることができた。

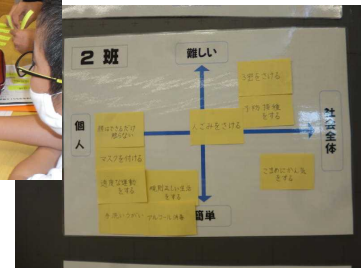
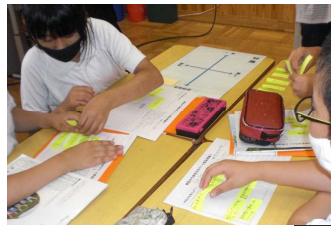


写真9 付箋や思考ツールを用いた話し合い

運動領域では、学習の中で子供たちが考えた技や作戦をネーミングしたり（写真10）、よい動きのためのポイントを言語化したり（写真11）して、全体で共有することで、子供たちの対話がスムーズになる様子も見られた。



写真10 技や作戦のネーミング

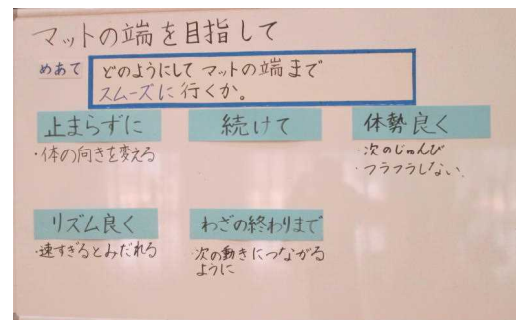


写真11 マット運動の動きの言語化

協働的な学びを進めるためには、学習の中で使う言葉を共有することが大切である。ユニバーサルデザインの視点からも、子供たちがイメージできる言葉を使うこと、動きの言葉は、子供たちとの話し合いを通して統一することが必要であ

ることを教員間で確認した。

昨年（R2）の取組後に行ったアンケートでは、体育学習で話し合ったり（図9）、助け合ったり（図10）したと答えた子供が増え、協働的な学びが体育学習の中に位置付しつつある。前述の子供の実態で挙げたように、自分の考えや意見を伝えることは本校の課題である。体育科の学習の中で、子供たちが互いの考えを伝え合い、認め合うことを通して、学びを共有するよりよい協働への支援についても検討していきたい。

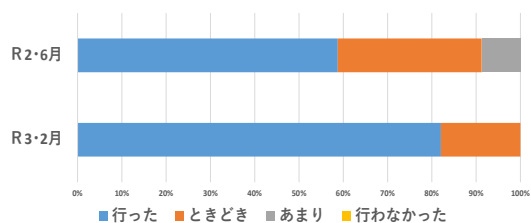


図9 話し合う活動を行った

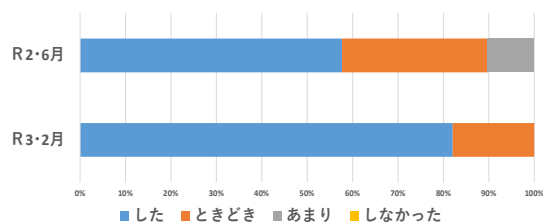


図10 助け合ったり、役割を果たしたりした



(3) 研究の目的

- ① 「おもしろいコト」の共有を図るための支援や手立てについて、実践を通して得た成果と課題を提示する。
- ② 子供の学びの状況を適切に把握し、協働的な学びを促す観点や手立ての具体化を図り、成果と課題を提示する。

(4) 研究内容

① 『『おもしろいコト』の共有』を図るための支援

ア どの子ども夢中になれる場の設定

- ・「おもしろいコト」の教材化
- ・実態から想定されるつまずきへの対応
- ・ユニバーサルデザインの視点

イ 子供の実態に応じた「問い」の提示

- ・見通しがもてる導入時の「問い」
- ・こだわりをもって課題追求する単元を通した「問い」

② 子供の実態把握と協働的な学びを促す支援

ア 実態把握の方法と効果的な活用

- ・導入時、学習展開時における事前調査の活用
- ・学習の振り返りから見取る子供の学びとその活用

イ 子供の実態や学びの状況に合った協働的な学びの支援

- ・子供の学びに応じた課題解決の場の設定
- ・自己選択、自己決定を促す情報提供の工夫
- ・学びをつなげ、子供をつなげるための学習言語の共有

